

| 診断書・意見書 | | | | |
|--|--|-------|---|-----|
| 利 用 者 | 住所 | | | |
| | 氏名 | | | |
| | 生 年 月 日 | 明・大・昭 | 年 | 月 日 |
| | 性別 | 男・女 | | |
| 心 身 の 状 況 | 1 寝たきりの状態 (ランク : J ・ A ・ B ・ C) ・ランクA、B、Cに該当する者については、いつ頃その状態に至ったか。 (平成 年 月頃より) 2 認知症老人 (ランク : I ・ IIa ・ IIb ・ IIIa ・ IIIb ・ IV ・ M) ・ランクIIIa、IIIb、IV、Mに該当するものについては、いつ頃その状態に至ったか。 (平成 年 月頃より) ※裏面の表を参考にして該当するものに○をする。 | | | |
| 本 人 の 現 況 | 1 自宅加療中 2 入院中 [医療機関名 :] [今後の見込 :] 3 その他 () | | | |
| | 1 要介護認定の結果 (要支援1・要支援2・要介護1・要介護2・要介護3・要介護4・要介護5) | | | |
| おむつ使用状況 | 平成 年 月頃より (使用継続期間 年 箇月) | | | |
| 今後の見込期間 | 発行日から (1, 6月未満 2, 6月以上1年未満 3, 1年以上) | | | |
| 上記のとおり診断する 平成 年 月 日 医療機関名 : 所在地 : 医師等氏名 : 印 _____ | | | | |

◆ 障害老人の日常生活自立度(寝たきり度)判定基準

| | | |
|-------|-------|--|
| 生活自立 | ランク J | 何らかの障害等を有するが、日常生活は自立しており独力で外出する 1 交通機関を利用して外出する 2 隣近所へなら外出する |
| 準寝たきり | ランク A | 屋内での生活は概ね自立しているが、介助なしには外出しない 1 介助により外出し、日中はほとんどベッドから離れて生活する 2 外出の頻度が少なく、日中も寝たり起きたりの生活をしている |
| 寝たきり | ランク B | 屋内での生活は何らかの介助を要し、日中もベッドでの生活が全体であるが座位を保つ 1 車いすにより移乗し、食事、排泄はベッドから離れて行う 2 介助により車いすに移乗する |
| | ランク C | 一日中ベッドで過ごし、排泄、食事、着替えにおいて介助を要する 1 自力で寝返りをうつ 2 自力では寝返りもうたない |

◆ 認知症老人の日常生活自立度判定基準

| | 判定基準 | 見られる症状・行動の例 | 判定にあたっての留意事項及び提供されるサービスの例 |
|-------|--|--|---|
| I | 何らかの認知症を有するが、日常生活は家庭内及び社会的にはほぼ自立している。 | | 在宅生活が基本であり、一人暮らしの可能である。相談、指導等を実施することにより、症状の改善や進行の阻止を図る。 |
| II | 日常生活に支障をきたすような症状・行動や意思疎通の困難さが多少見られても、誰かが注意をしていれば自立できる。 | | 在宅生活が基本であるが、一人暮らしは困難な場合もあるので、日中の居宅サービスを利用することにより、在宅生活の支援と症状の改善及び進行の阻止を図る。 |
| II a | 家庭外で上記IIの状態が見られる。 | たびたび道に迷うとか、買い物や事務、金銭管理など、それまでできたことにミスが目立つ等。 | |
| II b | 家庭内でも上記IIの状態が見られる。 | 服薬管理が出来ない、電話の対応や訪問者との対応などひとりで留守番ができない。 | |
| III | 日常生活に支障をきたすような症状・行動や意思疎通の困難が見られ、介護を必要とする。 | | 日常生活に支障をきたすような症状・行動や意思疎通の困難さがランクIIより重度となり、介護が必要となる状態である。 「ときどき」とはどのくらいの頻度を指すのかについては、症状・行動の種類等により異なるので、一概には決められないが、一時も目を離せない状態ではない。 |
| III a | 日中を中心として上記IIIの状態が見られる。 | 着替え、食事、排便・排尿が上手にできない・時間がかかる。 やたらに物を口に入れる、物を拾い集める、徘徊、失禁、大声・奇声をあげる、火の不始末、不潔行為、性的異常行為等 | 在宅生活が基本であるが、一人暮らしは困難であるので、訪問指導や、夜間の利用も含めた在宅サービスを利用し、これらのサービスを組み合わせることによる在宅での対応を図る。 |
| III b | 夜間を中心として上記IIIの状態が見られる。 | ランクIII aに同じ | |
| IV | 日常生活に支障をきたすような症状・行動や意思疎通の困難さが頻繁に見られ、常に介護を必要とする。 | ランクIIIに同じ | 常に目を離すことができない状態である。症状・行動はランクIIIと同じであるが、頻度の違いによって区分される。 家族の介護力等の在宅基盤の強弱により、居宅サービスを利用しながら在宅生活を続けるか、または特別養護老人ホーム・老人保健施設等の施設サービスを利用するかを選択する。施設サービスを選択する場合には、施設の特徴を踏まえた選択を行う。 |

| | | | |
|---|--|--|--|
| M | 著しい精神状態や問題行動、あるいは重篤な身体疾患が見られ、専門医療を必要とする。 | せん妄、妄想、興奮、自傷・他害等の精神症状に起因する問題行動が継続する状態等 | ランクI～IVと判定されていた高齢者が、精神病院や認知症専門棟を有する老人保健施設等での治療が必要となったり、重篤な身体疾患が見られ老人病院等での治療が必要となった状態である。専門医療機関を受診するよう勧める必要がある。 |
|---|--|--|--|